ー安心しておまかせするー

先年ご往生された梯實圓(かけはしじつえん)和上さんの最後のご法話を紹介いたします。

……私みたいに八十も半ば過ぎるとな、何が起きるやわかりゃしませんからな。今日あって明日のことは分かれへんねんから、危ないもんや、ほんまの話。お互い自分の「後生の一大事」を、シカッと決めとかなあきませんで。
ほんまに大丈夫ですか？

阿弥陀さまのお救いが一番ハッキリするのは「なんまんだぶ」という声です。
この声が聞こえてくるはずだ。聞こえなんだら称えなはれ。称えたら聞こえてくるでしょう。
なんぼ耳が遠うても自分のいうた声は聞こえるわ。

阿弥陀さまがね、「必ずたすけるぞ、私にまかせなさいや」とおっしゃってくださってるんです。
このお言葉に対してそうやったなぁと、気がついたら「ありがとうございます」と言うたらええ。
それがお念仏なんです。
気がつかなんだら黙っとったってええ。
「たすける」と言うてくださってんねんから黙っとったかて助けてくださる。
そうでしょ。
信心ちゅうのはワシがしっかりすることとちゃいまっせ。
病気でもしてみなはれシッカリなんか出来ますか。そしたらシッカリせよというのは、仏さまが私におっしゃってるんと違うだろ。仏さまの方が「心配するな、私がシッカリしてるから俺にまかせとけ」とおっしゃってるんですよ。だから「ありがとうございます」と言いなはれ。
言えなんだらそれでもええわ、それでええ。まかせといたらええんだ。それが「まかせる」いうことや。

阿弥陀さまは「たすけてやるぞ」とおっしゃる。それが 「なんまんだぶつ」という言葉ですよ。
「俺が引き受けたから心配するな」 というのが阿弥陀仏という言葉の意味なんです。
ご開山（親鸞聖人）はそうおっしゃる。

「なんまんだぶつ」はね、「たすけてください」と、すがりついてるんじゃないんですよ。
安心しておまかせをする。これが浄土真宗の信心といわれるもんなんですね。
「なんまんだぶつ」という声が聞こえたら、「俺がお前を引き受けたぞ」と阿弥陀さまが一声一声、安心を与えてくださってるんやなぁといただくんです……

『あたりまえの不思議』星野親行著より

このご法話で和上さんは、浄土真宗の要(かなめ)である「信心」を、「阿弥陀さまに安心しておまかせすること」と、繰り返し繰り返し噛んで含めるように語っておられます。

ではどうすれば阿弥陀さまにおまかせすることが出来るようになるのでしょうか？

それは、み教えを聞かせてもらう（聴聞）以外ありません。
この私を必ず救うと誓われた阿弥陀さまのご本願を聞かせてもらうのです。

念仏の教えは、「かかる殊勝の道理あるが故に、深く信じ奉るべきものなり」と蓮如上人が仰っていますように、聞けば納得せずにはおれない深い道理に基づいた教えが説かれています。
ですから、心の底から頷けるまで、ひたすら聞法に励むのです。

そうすれば必ず阿弥陀さまのご本願のハタラキ（ワシにまかせ、必ず救う）が、私の心に届くはずです。その願いが到り届いた時、阿弥陀さまにすべてをおまかせする心が生まれるのです。
その心を「信心」というのです。

こうして信心が定まる（阿弥陀さまにおまかせする）時、ご本願のお力で、この私が仏になるべき身に定まり（正定聚（しょうじょうじゅ）に住すると言います）、この世のいのち終える時、直ちに浄土に生まれ、この上もない悟りを開かせていただくのです。

これは、長い長い迷いの世界を流転してきた私の「いのち」の終りを告げるものであり、同時に、浄土へ向かう新たな「いのち」の誕生を意味するものです。
これによって、私の「いのち」の行く末がハッキリと定まるのです。
まさに「信心の定まる時、往生また定まるなり」（末燈鈔）です。

この「いのちの行く末が定まる」ということがまことに大事なことなのです。

私たちにとって、人生最大の問題は何かと言えば、私は死んだらどうなるのかということだと思います。
つまり肉体の死後の私の「いのち」の行く末です。
これを「後生の一大事」といいます。

和上さんもご法話の冒頭で「お互い自分の『後生の一大事』を、シカッと決めとかなあきませんで。ほんまに大丈夫ですか？」と仰っていますように、この問題が解決されない限り、私たちは本当に安心してこの人生を生きることは出来ないのです。
その問題の唯一の解決方法が「阿弥陀さまにおまかせする」ということなのです。

私の肉体は寿命が来ればやがて崩壊するでしょう。
しかし私の「いのち」は光り輝く浄土の世界（アミダのいのちの世界）へ帰っていく「いのち」だと知らされる時、もう心配なくこの人生を生きられ、死んでいけるのです。

私たちがご法話を聞かせてもらうのは、この「後生の一大事」を解決するために聞かせてもらうのです。聞いておけば人生の参考になるというようなカルチャーセンタで話を聞くのとは根本的に違うのです。

和上さんは、次のように仰っています。
……自分のいのちでありながらそのいのちがどんな意味を持っているのか？そして私はやがて息が切れたらどうなるのか？
いやぁー、そのことを聞き、考える時間が全くありませんでしたなどと言うのは、私は許しません。お互いにそのことを聞き、考える時間は充分にあったはずや、わしゃそう思う。自分のいのちでありながら、そのいのちがやがてどうなってゆくのかを、しっかりと聞き開いておかないというのは、自分のいのちに対して無責任すぎます。失礼というもんや……

まことにその通りです。
そうしてその「いのち」の意味を、次のように仰っています。

……よろこびも悲しみも、人生のあらゆる出来事を阿弥陀さまのお心を味わうご縁といただき、息が切れた先に限りない「光」と「いのち」のお浄土を思う。
そして、浄土に生まれれば、今度は阿弥陀さまとともに、苦しみ悩むあらゆる「いのち」を支え救うハタラキをさせていただく。それが私の「いのち」の意味です……

今、私たちは幸いに生まれ難い人間世界に生まれさせて頂き、聞き難い仏法を聞くご縁を頂いています。
今生において、この人間存在の一番大きな問題（後生の一大事）を解決しなければ、再び迷いの世界を流転することになるでしょう。
無常の世界に生きる私達です。一刻も早く、この「いのち」の問題を解決しておかねばならないと思います。その解決方法はすでに用意されているのですから。

平成２８年２月　「光明寺だより９１号」より